

科学者の目

森 一久

国民の重要な栄養源を担う漁業界と、将来のエネルギー供給の基軸たるべき原子力業界とが、合理的かつ冷静な関係を保てなければ、資源小国の日本にとって大きな不幸である。これは及川さんご自身の言葉でもあるが、原子力開発の始まった昭和三十年代以降幾多の試行錯誤を経験しつつも、その中で及川さんの示された教示や見識そして決断が、今日の状況を築く大きな基盤となった。

この間及川さんのご指導を仰ぎながら私は、あの温かいお人柄の中に、きらりと光る科学者の眼のようなものをしばしば垣間見たものである。

あるとき及川さんが高校は理科（乙類）だったと聞かされ、「なぜ医学でなく法律に」と尋ねる私に、「いや、気が短くて向いてないよ……。でもね、僕は医学にはいささかの貢献をしているんだよ」とちやうど亡くなられたばかりの高橋信次さんの思い出話となった。高橋さんといえば、今日では何人も知るCTによる診断術——人体のあらゆる臓器を輪切りに撮影して癌腫などの異常を早期発見して多くの人を救っている技術——の創始者として世界に著名な医学者で、私どもも放射線の安全性についていろいろとご指導願ってきた

及川さんご自身

一平成、三平一、いささか

方である。

「それはまた」と乗り出す私に、「いや彼とは二高で同じ寮だった。彼は経済事情で進路に悩んでいた。私はこれからは医者のカンより科学を駆使する時代だ。力を貸すから元氣を出して放射線の方へ進んだら、と勧めてね……」と。考えてみれば、今を去る五〇年も前のこと。この及川さんの助言は大変な先見である。あらためて及川さんのお顔をまじまじと見つめ直したことであった。

日本原子力産業会議（原産）が漁業との共存共栄の道をさぐるべく、本格的な調査研究に取組みはじめた昭和四十二年、全漁連と共同で原子力施設環境問題漁業者調査団（団長・浜田正氏）をはじめて欧州に派遣した。その結論は、欧州では原子力がクリーンな産業として確立しており、日本でも十分な科学研究と規制体制を整えれば、漁業との共立は可能ということであった。これらの結論が、後の（財）温水養魚開発協会、（財）海洋生物環境研究所、原子力安全委員会、海洋放射能評価計画などとして結実していくわけで、その一つ一つの設立や運営に及川さんの大きなお力をいただくことになった。

あの調査団は、茨城、三重、島根、鹿児島各県漁連の会長・幹部からなる大型調査団で、世話役として加えていただいた私も道中コチコチの体たらくだったが、さすがに帰途の機中では雰囲気も和やかに話に花が咲いた。そのとき、副団長格の池尻文二さん（当時常務）から「原産には漁業問題の経験者はいるの」と尋ねられたのがきっかけで、以前全漁連に

在籍していた苦米地稜君を紹介して頂くことができた。同氏は原産事務局の中核として、前記の団体の設立や関係法律の制定促進に三面六臂の活躍をされ、さらに総務部長として原産の近代化にも力を発揮してもらったのであるが、惜しくも昭和五十七年五三歳の若さで世を去った。「仕事に戻れない身の不甲斐なさ」を病床から書き送ってくれた彼の手紙は、私の忘れ得ぬものとなっているが、大分あとになって彼は苦学の時代に、及川さんのお宅で世話になっていたこと。またそれで同君が漁業界に身をおくきっかけになったという事情を聞かされ、及川さんと我々の因縁の並々ならぬことを思い知ったことであった。一五年間にわたって原産の会長を勤め昨年逝去した有澤廣巳氏も、及川さんと同じ二高

の出身であり、同窓会のことなどでこの両大先輩はよく言葉を交わされていた。

いま、原子力界は反原発の波の中で、また漁業界もきびしい国際環境の中で、それぞれ大きな試練に立たされている。及川さんを中心にこれらの方々は、天上に会し何を語られていることであろうか。地上の我々に叱咤激励が飛んできそうな氣のする昨今である。